発行日　1989年12月20日発行（毎月20日発行）通巻95号
1982年8月16日第三種郵便物認可

ISSN 0289-6680

Trial & Error
トライアル・アンド・エラー
試行錯誤

No.95

橋の向こう側、エチオピアへ帰る

特集　難民帰還

自発的本国帰還 …… 3
ソマリア　恒久的解決へ動き出す …… 6
エチオピア難民いよいよ帰る!? …… 7
タイ・カンボジア国境　難民の帰る日 …… 8
カンボジア　帰還者をとりまく国内環境 …… 10
ラオス　加速する本国難民帰還 …… 11
ベトナム　2度と故郷には帰らない …… 12
心の依り所は何処に… …… 13
エシャトーとダニエルの日本日記 …… 16
投稿　伐採と闘う村 …… 18
いんたびゅう　スザンヌ・マールさん …… 20

JVC Japan International Volunteer Center

1970年代後半から80年代にかけて難民問題が世界を席巻した。インドシナ，アフガニスタン，東部アフリカ，南ア周辺諸国，中米諸国……。現在1000万人以上の難民があふれているという。

ところが，超大国が弱体化しつつある現況下で，膠着状態にあった難民問題に風穴が開くのではと，期待感を抱かせる現象がこのところ起きている。とりわけ，自分の故郷・故国に帰れる難民が急増しているのは，その好例であろう。今回は，この「難民帰還」にスポットを当てた特集を組んだ。

この特集を編集する過程で，次の点を念頭に置いていた。

一般的に本国への帰還が一番望ましい解決であると言われている。だが，本国帰還がどの難民にとってもベストとは言えないと，この特集でも明確になった。最終的には難民自身の選択を優先すべきで，「本国が，故郷が，お前にとって一番いいだろう。だから帰った方がいい」などと他人が勧めるのは偽善行為であり，「だから帰れ」と強制するのは，まったくの人権侵害である。

第二に，難民問題は，独立した問題ではなく，他の社会問題と密接に関係している問題である，という点。このところ日本でも取り沙汰されている「経済難民」のことは，この一例である。また，難民がどこかの国で生活の再建を始める際に直面する問題は多岐にわたっている。これらのことに気づくと，形の上で難民が難民でなくなっても，難民が発生した原因がすべて解消したとは限らないと分かる。

最後に触れたい点は，「本国ってなんだろう？」という問いである。政治的，軍事的権力者によって迫害された難民が「クニに帰りたい」と言った時，いわゆる「国家」を意識して言っているとは思いがたい。どちらかと言えば，「故郷」を意識しているのではないだろうか。この問題はまた，一握りの者を利する「国境」という矛盾を私たちに想起する。仮に「国境」がなくなれば，難民という定義はもはや意味を失うのだが。（編集部）

自発的本国帰還

国際連合　難民高等弁務官事務所(UNHCR)
広報担当官　斎藤　千香子

ザンビアからナミビアへ帰還する家族　　UNHCR / J. Zaprzala

今世紀最も注目を浴びたナミビアの独立へ向けて

南アフリカ共和国の北西に位置するナミビアは，1989年11月１日，歴史的に大きな第一歩を記した。国連監視団の見守る中，悲願だった平和的独立へ向けての制憲議会選挙が行われたのだ。この選挙を前に，今年６月から，アンゴラやザンビアなどの近隣国や，その他の41カ国から，続々と４万1000人の難民たちがUNHCRの手配したチャーター機などで帰国していった。中には，遠くキューバからも，故国再建の夢を胸に１万2000キロの旅路についた若者たちがいた。世界が注目する中，こうしてナミビアへの本国帰還作戦が展開されていったのだ。

しかし，帰国時の興奮がさめれば，早晩，厳しい現実に直面することになるだろう。なにしろ，大半が15年も前に故郷を後にして以来，ずっと外国で暮らしてきた人々である。しかも帰還者の多くは，基本的なインフラストラクチャー（社会・経済基盤）さえも未整備の地方へと帰っていったのだ。これから故郷の復興・再建という大変な仕事が待ち受けている。難民問題の解決方法の中でも，最も自然な，そして難民自身にとっても一番望ましいといわれる「自発的本国帰還」でさえ，決して平坦な道ではない。

本国帰還とUNHCRの役割

難民が自分から帰国したいと思っても，それなりの条件が整わなくては帰還は実現しない。まず第一に，母国は難民が戻っても安全な状況であるかどうか，という点。通常は，出身国の政府が難民に対して懲罰なしの受け入れを表明するとか，和平が成立するなど，国際・国内状況に何らかの変化が認められて初めて，帰還が始まる。自力で帰る者もいれば

UNHCRの援助の下で組織的な帰還計画によって帰る者もいる。ナミビアの帰還はほとんどが後者であった。

アフリカでは，この他いくつかの帰還計画が実施されていて，ウガンダ，ソマリア，モザンビークなどから次々と難民が故郷に戻っている。帰還者には，帰国後も一定期間，UNHCRから若干の経済的援助が与えられる。UNHCRは，難民の帰国後，安全を確認するためのモニターも行うことになっている。

中米でもこのところ帰還者が増えており，特にホンジュラスからは1988年11月までに合計1万人以上がエルサルバドルに帰国したという報告があった。しかし，最終的に本国帰還を決定するのは難民自身であり，国連も，国際社会も，難民が帰国しやすくなる環境作りと帰国の際の手助けをするにすぎない。

500万人のアフガン難民は帰国できるのか

国連が間に入ってアフガニスタンとパキスタンの和平協定が結ばれたのが1988年4月。それから4カ月後の8月に，私はパキスタンを訪れた。当時，イスラマバードやペシャワールに住むアフガン難民の男たちは，国連の和平調停そのものについては，「このような努力は有難いが，これで我々がすぐに故郷に帰れるようになるとは思えない」と懐疑的であった。しかし同時に「我々の望むイスラムの国家が実現したら帰りたい」と，それがいつになるかは予測できなくても，帰る日は必ず来ると信じている口調であった。パキスタン人の親方のもとで，自転車修理や大工として修業中の少年たちは，「アフガニスタンに帰ってからもできる仕事だから」と言った。親たちに連れられて来た時は，幼なすぎて，ほとんど記憶にすら残っていないはずの故郷に帰る日のための準備に励んでいるのである。また，多部族が共に居住するキャンプでは，女性は異なる部族の男性の目にふれてはいけないという掟のために，塀の奥深く閉じ込められている。彼女たちは，そうした生活にうんざりといった様子で，望郷の念というより，むしろ，もっと自由にふるまえる故郷での生活に戻りたいというのが本音のようだった。

アフガン難民の本国帰還に向けて，パキスタン国内で活動しているいくつかの国際的なNGOは，アガ・カーン国連アフガニスタン援助調整官の事務所やUNHCR，WFP（世界食糧計画）などと協力しつつ，準備を開始している。これまでは，パキスタンの経済市場を意識した技術訓練や商品の製造をアフガン難民に指導してきた団体も，少しずつ，アフガニスタンに帰国しても役に立つ指導内容へと移行しているようだ。難民の女性たちが作る「ふとん」も，帰国の際に持ち帰れる品物の一つに加えられている。出来上がった製品をUNHCRが買い上げて帰還者に配る予定だそうだ。

帰国の準備はアフガニスタン国内でも進んでいる。各地に埋設された地雷の撤去や，農業用水路の調査など，「サラーム」作戦と名付けられた合同ミッションが何回かパキスタンやイラン，そして首都カブールから送りこまれている。ここでも，荒廃した国の再建を含めた援助・復興計画が練られていて，実際に難民たちが移動を始める前に，入念な下調べを行っている。

しかし，あれから1年余りたった今，アフガニスタンへ大勢の難民が帰ったという話はあまり聞かない。逆に，戦闘が激化したといわれるジャララバード周辺から，新たな難民が流出したというニュースを聞くたび，暗たんたる気持ちになる。

インドシナ難民の本国帰還

1975年のインドシナ半島における大量難民の発生からすでに15年たった。この間，インドシナ三国（ラオス・カンボジア・ベトナム）を離れた人々の数はおよそ200万人といわれる。しかも，流出は今も続いており，国際社会の努力によって160万人の難民が安全に定住できる場所を得られたにもかかわらず，東南アジアのキャンプには収容しきれないほどの人々が生活している。

インドシナ難民の場合は，発生当時から，本国帰還を想定した解決方法がとられなかった点が，他の地域の難民問題と大きく違うところである。1979年7月にスイスのジュネーブで第一回「インドシナ難民国際会議」が開催され，この時の主な合意事項は，①第一次庇護国での一時的な保護，②その後の，速やかな第三国定住，というものだった。つまり，実際は第三国定住が進まないうえ，流出はおさまらない。一次庇護国のキャンプに滞留する難民の数が増え，その滞在期間も長くなるなどの問題がおこり始めた。そこでラオス・タイ・UNHCRの三者会談の結果，ラオス難民の本国帰還が1980年から組織的に動き出した。カンボジアやベトナム難民については，ほんの少数の個別ケースが帰還した以外，この15年間に目立った動きは見られなかった。

1989年6月，「インドシナ難民国際会議」が，再

度ジュネーブで開催された。ここ2，3年で再び，急増し始めたベトナム・ボートピープルの問題が契機となって開かれた会議だけに，参加者の中には流出抑止のための厳しい措置を望む声もあったと聞く。今回の決議の柱となったのは，ベトナム・ボートピープルに対する「難民資格審査(スクリーニング)制度」の導入と，審査の結果，難民として認められなかった人々の「自発的本国帰還」である。

まず，帰還希望者はUNHCRにその意思を伝え，名簿に登録する。そして，帰国の際はUNHCRの職員が付き添い，ハノイまで飛行機で戻ることになる。帰還者は，帰国後の一定期間，UNHCRから生活再建のための経済援助が受けられることになっている。こうして，東南アジア地域で最も多くのベトナム・ボートピープルを抱える（1989年9月末現在で，5万6388人）香港から11月3日までに507人がベトナムに帰国した。この数を多いと見るか，少ないと見るかは，議論の分かれるところだが，これだけのベトナム人が一度に帰還したという事実は，やはり画期的な出来事である。香港では，さらに2000人以上が帰還を希望しているそうである。今後，域内の他の国からの帰還希望者が後に続くかどうかが注目されるところだ。問題は，帰国後の再適応だろう。UNHCRは，定期的に帰還者のその後の様子をモニターする予定である。

このように，わずかながらもラオスやベトナムへの帰還者が増えてくると，当然ながら「カンボジアはどうなのか」という質問が出てくる。これまで何回か和平交渉が試みられ，いずれも不調に終わったと思われているようだ。一日も早く平和が戻ることを祈っているのは，誰よりも，カンボジアを後にせざるをえなくなった難民自身だろう。

難民問題の解決は，国連や各国政府だけではなく，民間団体の協力が不可欠だ。本国帰還の場合は，出身国の社会・経済的状況がどのくらい好転するかが成否のカギを握るため，国際社会の開発援助が重要な意味を持ってくる。魅力的な国造りが帰国への呼び水になるからだ。そういう点で，JVCのカンボジアとラオスのプロジェクトは，民間ならではのキメの細かさと地域社会に溶け込むことができるという優位性を生かして，今後大いに発展が期待される。

※掲載記事は個人の立場で書かれたもので，UNHCRの見解を代表するものではありません。

最近の主な本国帰還の例

アジア	パプア・ニューギニアから **インドネシア(イリアンジャヤ)へ**	1,590人	アフリカ	スーダン，ザイールから **ウガンダへ**	31万7,600人
	タイから**ラオスへ**	2万4,000人		アンゴラ，ザンビア，ボツワナ他から **ナミビアへ**	4万1,000人
	インドから**スリランカへ**	2万1,600人	中南米	ホンジュラス，グアテマラから **エルサルバドルへ**	1万3,000人
	香港から**ベトナムへ**	507人		メキシコ，ホンジュラスから **グアテマラへ**	1万3,500人
	イラン，パキスタンから **アフガニスタンへ**	若干人		北米，カリブ海，中南米から **ハイチへ**	3,100人
アフリカ	中央アフリカ，スーダンから **チャドへ**	15万2,000人		コスタリカ，ホンジュラスから **ニカラグアへ**	3万5,000人
	ジブチ，ソマリア，スーダンから **エチオピアへ**	10万人		メキシコ，キューバ，欧州から **ウルグアイへ**	2万人
	マラウイ，他から **モザンビークへ**	11万6,000人			

資料提供 / UNHCR

ソマリア　恒久的解決へ動き出す

JVC ソマリア代表　金 子 一 弘

エチオピアへ帰るトラックを待つ

■本国帰還の経緯

ソマリアに滞留するエチオピア難民（民族的にはソマリ族）の本国帰還は，1986年ブルドボ地区の難民６万5000人のうち，その約７割を占めるオロモ族がエチオピア南部のシダモ州への帰還を希望したことに端を発している。

UNHCRによれば，1988年末までに29回の帰還作業が行われ，6270人が帰ったという。その多くはオロモ族で，難民の大多数を占めるオガデン族やマレハン族（注１）は含まれていない。

■近況と今後の予定

1988年４月３日，ソマリアとエチオピア政府は，難民発生の原因となった1977年来のオガデン戦争を解決する合意に達した。この合意により，国境からの両国正規軍の撤退，戦争捕虜の交換，外交の正常化が実現しつつある。

この変化によってUNHCRは，これまでの援助の在り方を大きく前進させ，難民問題の早期解決へ向け努力し続けている。今年になって，７月と９月にジュネーブとモガディシュにおいて，三者会談（ソマリア政府，エチオピア政府，UNHCR）が開催され，難民問題の解決に最良と思われる本国帰還を，三者の協力で進めるという合意を得ている。これまでUNHCRによって提案され実施されてきた本国帰還事業とは違い，両当事国が基本的に合意しその実施が保証されている点で画期的である。

10月に発表されたUNHCRの事業計画では，難民がそれぞれの自主的判断によりエチオピアへ帰還か，ソマリアでの定住かを選ぶことができ，両国政府の協力のもとで実施されるとなっている。その具体的な内容は，①今年10月から12月末までに難民の再登録を済ませ，②その後，大規模に本国帰還を進める，というものである。UNHCRは，帰還する難民はもとより，ソマリアでの定住を希望するものにも，一時金（注２）と約１年間の食糧援助を行うことで両国政府と合意した。

過去10年間にわたりソマリア国内で庇護され食糧援助を受けてきたエチオピア難民は，上述のように両国の国交正常化と難民の本国帰還に関する三者合意によって，もはや難民ではなくなる。

■残された問題点

これらの対応が行われても，いくつかの問題が残る。まず第一に，過去10年間も食糧援助を受けてきた難民の生活基盤をどのように確保するのか。第二に，帰還する難民の総数がまったく予想されておらず，数十万にもなる可能性があり，その人口移動に対する三者の対応はきわめて不十分であること。

これらに加え，最も大きな問題はソマリア国内の政情である。反政府ゲリラの活動が昨年から活発であった北部に加え，すでに南部においても政府軍のコントロールができない事態が数カ所で報告されている。また，経済の破綻状況はますます悪化しており，インフレは人々の生活を圧迫し続けている。

したがって，「難民問題の早期解形」を目指す事業計画は，ソマリアの政治経済的な困難さと密接に関係しあい，決して楽観できない。その実行にあたっては様々な問題に直面するであろう。

JVCは，この本国帰還事業に対し，直接的にも間接的にも協力してきた。JVCの関係する農民が帰還したいと申し出た場合，特に引きとめたりせず，その自立意志に任せたい。

（注1）　ソマリ族はオロモ族，オガデン族，マレハン族などの小部族に分かれる。

（注2）　２つのグループに分け，一時金が出る。
①本国帰還の家族（一家５人の場合）に対しては350米ドル相当のエチオピア通貨。
②ソマリア国内に定住する家族に対しては280米ドル相当のソマリア通貨。

エチオピア難民いよいよ帰る!?

磯田厚子

I：いよいよ難民の本国帰還か定住かを決める登録が始まったけれど，率直なところ人々の気持ちはどうなの？

ジャラクシ難民キャンプでは登録チームが投石されたと聞くけど……。

S：キャンプで地位のある人が登録を阻止しようとしている。キャンプがなくなれば職を失うからね。でも，登録チームは翌日別のキャンプで活動を始めたよ。彼らは人々に「何があろうと契約だから毎日キャンプへ来る。そして3カ月経ったら登録は終了だ」と言っている。

R：ベレット・ウィンのボウオ難民キャンプでは初日に91人の難民が登録に来て，全員が本国帰還に申請をしたって……。

I：ということは，多くの人が帰還に登録するのかな。

R：そう思う。その方が食料援助が多いもの。今度はあっちへ帰ってからもらおうと……。

I：援助のあるところへ移ろうというだけのことじゃないの！？

S：いや，何も援助がなくても自分の土地だからね。ソマリア側はやっぱり他人の土地。帰れるなら帰りたいのが本心だよ。

R：皆同じソマリ族といっても，各地域はそれぞれの部族の領地だからね。よそから来た者は通行はかまわないけど，そこで農業や居住・家畜の放牧など，できない習わしなんだ。町だって住むにはそこの部族の身元保証人が必要だし，居心地が良くない。

S：そう，祖国というより故郷に帰りたい。

I：10代，20代前半の人たちはどうかな？

S，R：それが問題なんだ。

S：こちらに居たいと言うだろうな。向こうのことはよく知らない。覚えていても，飢えや何もないブッシュ暮らしで厳しい労働というつらい印象だ。

R：キャンプで教育を受けたり，時計，ラジカセ，車など新しい品々に触れた若者はブッシュに戻りたくないよ。帰還前に逃亡する者もいるかもしれない。

I：帰還後についての心配はしていないの？

R：行き先や所属する部族によっては心配している者もいる。オガデン地方の部族や氏族間に闘争が起きているし，その地に残っていた人々とソマリアから戻った人々との間でも土地使用をめぐりいざこざがあるためだ。元の農地に戻れるか，職があるか，徴兵されないかと心配している。

S：遊牧中心の暮らしなら戻れるだろうけどね。

R：でも，10年のキャンプ暮らしで私たちも変わったからな。農場の収穫物を売る，それも高値の所へ運んで売るとか，ポンプで水を確保するとか，難民になる前は考えつきもしなかったことだ。お天気まかせに働いて，自給用の食料が確保できればハッピー。洪水で食料庫がやられたら，ひもじい思いをしながらまた作る。皆がそういう暮らしだった。しかしここで多くのこと，特に経済的に儲けることを知った。いまさらブッシュの暮らしには戻れないだろう。

I：あなた方2人はどうなの？

S：帰るつもりはないよ。家族も土地もないしね。

R：この間，母が故郷に行ってきたが昔の自分たちの農場は他人の共同農場になっていた。昔のことを言いだすやつは帰ってくるなと言われたそうだ。家が残っていて修繕しようとしたら，それも拒否されて，しょげ返ってた。今母には，もう戻るのはあきらめろと言っているのだけれど……。

I：10年間でお互いに大きく変わったということだね。難民が存在したその事実が1つの歴史を双方に作っていて，帰還すれば状況が以前のように復元できるというものじゃなくなっている。民族・部族・国境の対立をそのままにして，帰還すれば解決するとは言えないしね。

I：磯田厚子（ソマリアプロジックト，チームリーダー）
S：シアッド，R：ラシッド　難民出身のスタッフ

タイ・カンボジア国境

難民の帰る日

カオイダン，フィールドアドミニストレーター 清水 俊弘

パリ会談の決裂は，タイーカンボジア国境に新たな緊張をもたらした。アメリカは非共産勢力であるシハヌーク派の支援を，中国はポル・ポト派を中心に国境三派の支援を継続し，ベトナム軍の完全撤退を確認するための国際監視組織の設置さえできなかった。兵力の弱いシハヌーク派は中学生以上の若者に軍事訓練を，対するヘン・サムリン政府軍もベトナム軍に替わる自国民兵の増強をするなど，再び多くの若い命が戦火にさらされそうになっている。

こうした状況のなかで，国境沿いにある三派連合の各派キャンプの人口の変化は著しくなっている。KPNLF（ソン・サン派）のキャンプSite 2では，最近かなりの避難民が国内に戻っており，支持人口の減少を恐れる派の幹部がそれを押し留めているという情報を耳にする。また，ボーライなどの南部ポル・ポト派キャンプからは，ソクサン，Site 2などの非共産派キャンプに逃亡する者も多い。現在のポル・ポト派を支える人口のほとんどは，ベトナム軍介入当時に人質同然に連れてこられた農民であるため，その多くは機会があればその圧政から逃れ，他の非共産グループに身を預けたいと思っている。ベトナム軍の完全撤退後，ヘン・サムリン政府軍の兵士が自由の幻想にとらわれ三派連合側に投降してくる例も少なくない。この市民戦争とも，代理戦争とも，はたまた反越解放闘争とも見分けのつかない戦いにおける各派兵士たちの士気は極端に低い。Site 8にいるポル・ポト派の一幹部は，「あなたはポル・ポトのどういうところを支持するのですか」という某記者の質問に対し，ニヤッと笑みを浮かべただけだという。現在こうした交戦拒否者を庇護する“中立キャンプ”の構想が国連と赤十字国際委員会の間で練られている。

さて，UNHCRに統轄され，当初から中立キャンプを確立しているカオイダン難民収容所は，国境の戦闘をわき目に一見安定した日々を送っている。しかし，第三国定住の道が閉ざされたら，本国帰還以外に道のない彼らの胸のうちは複雑であろう。そんな彼らの政治的解決に対する意見は，おおよそ次の2つに分けられるようである。「基本的には，四派暫定政権に異論はない。ただし，シハヌーク殿下が主導権をにぎること。国内紛争の不安があるので強力な国際監視組織は絶対に必要」。「四派連立なんか絶対にうまくいくはずがない。国際組織がいたところで，いざ内戦が始まれば役にたたない。とにかくコミュニストがいる限り帰らない」。

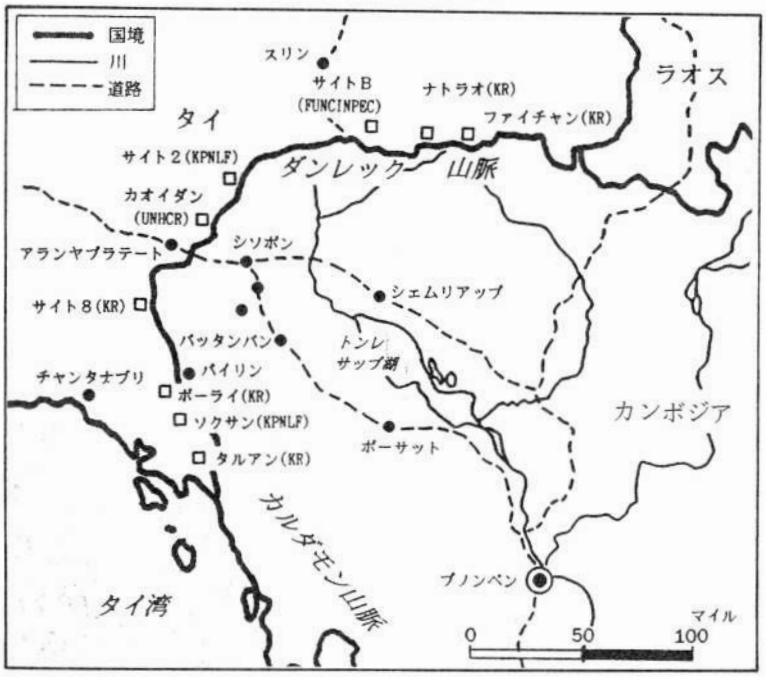
カンボジアってどんな国？

UNHCR/鈴木啓水

前者はかなり前向きに将来を考えている声である。彼らが四派暫定政府を受け入れるのは，ポル・ポト派を容認しているからではなく，総選挙において落選し，減らされることを信じているからである。ヘン・サムリン政府の主張するように現時点でポル・ポト派を排除すれば，ポル・ポト派の解放区が癌として残存し，逆に，将来に不安が残るという見方である。後者の意見は，たび重なる政権交替とその混乱に翻弄された一般市民の正直な声とも解釈できる。彼らの政治不信は我々の想像する以上に根深い。あれだけの大「下放」政策を行ったポル・ポト派が再び参政するなどとんでもない話であろう。

このほか，シハヌーク殿下が帰ったら我々も帰るという声もよく聞かれる。国際社会における殿下の評価はかならずしも高いとは言えない。しかし，彼らにとってシハヌーク殿下はやはり，特別な威光を放っている存在なのであろう。

キャンプの人々の声をもとに考えてみると，本当に信頼できる国際的保証を確立したうえで，シハヌーク殿下を首席とした暫定政権の樹立が，彼らにとって望ましい政治的解決であり，彼らの本国帰還を促す大事な要素であるといえるだろう。



国境地帯地図
タイ・カンボジア

カンボジア避難民が滞留させられているキャンプ。次の組織の管轄下にある。

□KR－クメール・ルージュ（ポル・ポト派）
□FUNCINPEC－独立，中立，平和，協力のためのカンボジア民族統一戦線（シハヌーク派）
□KPNLF－クメール人民民族解放戦線（ソン・サン派）
□UNHCR－国連難民高等弁務官事務所

『NGOが見たカンプチア』より

現実的な本国帰還とは

1979年から今日までに自主的に本国帰還を希望し，UNHCRの保護下で故郷に戻った者はわずか22名。この中には，三派連合の兵士として戦い，戦闘で負った傷の治療のため国境で唯一手術設備の整った外科病棟のあるカオイダンに運ばれ，回復後UNHCRに庇護を求めた者も含まれている。そして，帰還者全員がカンボジア国内に身寄りを持っていたため，帰還も比較的問題なく行われた。しかし，本格的に本国帰還が始まれば，過去20年近くにわたる混乱で家族を失ない，国内に身寄りのない人々も何千，何万という規模で帰ることになる。国連や政府は，土地や住居の調整，最低必需品の配給を約束し，各国NGOもさまざまな援助活動を展開することであろう。先頃開催されたCCSDPT（タイにおける難民救援連絡調整委員会）年次総会においても，「本国帰還とは，ただ単に難民を送り返すことではなく，彼らが再び社会に復帰することだ」ということが確認された。しかし，彼ら自身がおよそ10年にわたる受け身の生活の垢を落とし，自ら根づこうとするフロンティアスピリットを持たない限り，本当の意味での帰還は望めない。我々に最も求められるのは，こうした彼らの意識を支える援助なのである。

そしてJVCは

本国帰還が現実性をおびてきた今，職業訓練の分野に要求されるのは，これまでよりさらに短期に，より効果的な訓練を施すことのできるシステムの調整である。JVC技術学校では，これまでに約6000人の卒業生を出している。その大半は第三国に定住したが，残る卒業生の中にはキャンプ内では修得した技術を生かせる職（キャンプでは，各団体が難民に雇用機会を与えている）に就けず何もすることがなく無意味な日々を送っている者も少なくない。

カンボジアの写真を見て懐かしむ

JVCでは今，これらの人々の再トレーニングを考えている。理論，演習からなる88日間のコースを36日間に短縮し，復習と発展トレーニングを行う計画である。これに加えて，国境と本国の両側で活動するJVCならではの情報パイプを生かせば，彼らの修得した技術が本国でも役に立つことを確認させることができ，自信の回復につながることを信じている。そして，大規模な帰還が始まる時，我々は伴走者としてまた新たな一歩を踏み出すことになるだろう。

カンボジア　帰還者をとりまく国内環境

JVCカンボジア代表　古西　勇

足を失った人たちがベランダの手すりにもたれて休んでいた。職務中に地雷を踏んでしまったという兵士が多い。

ベランダの奥の長椅子に2人の女性が並んで腰掛けているのが目に留まった。1人は乳飲み子を抱えていた。もう1人はじっとうつむいていた。側に行って話を聞くまではまさかと思っていたが，やはりこの2人も足を無くしていた。うつむいていた方の女性はまだ若かった。彼女は戦略道路の建設作業中に地雷を踏んだという。

痛々しさと憤りで言葉が継げなかった。

プノンペンのリハビリテーション・センターを訪れた際の出来事である。

仮に彼女が危険な作業を嫌がって難民になっていたとしたら，足を失わずにすんだかもしれない。その場合，彼女が難民になることは過ちであるとはいえないと思う。

難民になろうと思うかどうかは，基本的には本人が自分の人生をどう見ているかに掛かっている。難民がカンボジアに帰ろうと思うかどうかも同様だ。

難民キャンプにいる人たちとカンボジア国内にいる人たち。ひところ，彼らの生活条件や技能レベルを比べてどちらが優位にあるかという議論があった。そういった議論は彼らを客体として観察するところから始まりがちである。そして，国内の生活条件を改善し難民の技能レベルを高めましょうという結論に終わる。

しかし，それだけでは難民に自主的にカンボジアに帰ろうという気持ちを起こさせるのは無理だろう。まずカンボジアの人たちを主体としてとらえ，彼らの個人個人の人生観に立って考えようとする姿勢が大切である。難民となった過去の経緯の中で，何が彼らの人生観を変えてきたのかを理解しなければいけない。

ただし，難民となったことが本人の意思ではなかった場合や幼児期からキャンプで過ごしカンボジアという国を知らない場合には，それぞれ違った接し方が必要であろう。

プノンペンにいるあるカンボジアの女性から，妹と弟の二人が母親や彼女の止めるのもきかず，タイとの国境地帯のキャンプへ行ってしまったという話を打ち明けられたことがある。写真と手紙が一度届いたきり何の便りもない。どうしているか心配で母親とそのことばかりを考えている。特に妹はまだ若いので本当に心配だといっていた。

ICRC（赤十字国際委員会）は，今年からプノンペンでカンボジア赤十字を窓口にして，そのような行方の分からない肉親を探す仕事を始めるようになった。そのことを彼女に伝えて赤十字に頼んで探してもらうように促したが，どうも気が進まないようだった。どうやら，家族が国境地帯へ行ってしまったことを公に知られたくないようだった。

難民がカンボジアに帰還すれば，彼らはその国の社会の市民と平等に見なされるべきだと思う。

それでは，どのような社会がそこに待ち受けているのだろう。

JVCが保健活動を行っているプノンペン郡を例にしてみよう。人口約6万人のこの地域社会では，人口の約一割近い人々が生活困窮者・災害による被害者・孤児・障害者として，ソシャルワークの対象者とみなされている。また，大人の女性の4人に1人が夫を先に亡くしている。

帰還してそのような社会の市民となる人がいるとしたら，私たちはどのように彼らと関わったらいいのだろう。既に社会の底辺にいる人たちを無視して帰還した人たちだけを援助したら，より不公正な社会を作り出してしまうだろう。

JVCは今まで帰還した人々を直接対象とした活動は行ってこなかった。可能性としては，国連の庇護の下に帰還する難民をJVCワークショップ/技術学校に訓練生として受け入れ，訓練終了後彼らに就職を斡旋することがまず考えられる。この案はワークショップ/技術学校の実施機関である自動車輸送公社とも話し合い，基本的な合意を得た。

もう一つの方向性としては，地域社会をベースに援助を進める場合，社会の進歩から取り残された人たちに常に目を向けることであろう。いかなる市民に対しても公正な社会ができるよう助けることが，将来帰還してくるであろう人々を受け入れる社会的土壌を豊かにするものと信じている。

ラオス　加速する本国難民帰還

JVCラオス代表　谷山博史

■日本から帰ったラオス人

ヴィエンチャン市のほぼ中心，凱旋門にほど近い住宅地の路地を入ったところに，クン・チャンペンの家はある。コンクリート造り，二階建てのちょっとした家だが，住めるのは2階だけで1階はまだ建築中。

クン・チャンペンが定住先の日本からこの5月にヴィエンチャンに帰って，最初にしたことがこの家造りだった。日本で貯めた5千ドルはみなこれに使ってしまった。この本国帰還して間もない彼に会ったとき，彼はラオスに残していた奥さんと子供たちに囲まれてホッとした様子だった。

クン・チャンペンのように第三国から直接母国のラオスに帰還するケースは，従来は希れであったが，最近のラオスの自由化と難民政策の転換に伴って，少しづつ増えてきている。今年に入ってから7月までに12人が第三国から帰還している。内訳は，アメリカから10人，スイスと日本からそれぞれ1人である。また12人のうち，9人がヴィエンチャン市に帰っている。日本からの帰還のケースはクン・チャンペンが初めてで，今後の彼の生活が注目される。

難民発生の背景

クン・チャンペンは，1980年に友人と連れだってタイに逃げた。彼は，ヴィエンチャンに居たときから日本企業の大塚家具で3年間働いていたので，日本に受け入れられると思っていたようである。彼はラオスを離れる時に奥さんにこう言ったという。「おまえは，子供を見るためにラオスに留まりなさい。日本に行ったらお金を送るから」と。

クン・チャンペンのように，政治的な理由というよりも経済的な理由で国を離れる人が多いのも，ラオス難民の一つの特徴であろう。だが，クン・チャンペンにしても他のラオス難民にしても，経済的な理由の背後には，政府による社会的・文化的な締めつけがあったことは確かである。たとえば，タイのテレビやラジオ放送はすべてラオス政府の妨害電波でシャットアウトされていたし，風俗営業に携わっていた男女はヴィエンチャン近郊の再教育センターに送られたり，女性はシンという民族衣装を着るよう強要されたという。

また革命後，それ以前には政府の財政を支えていたアメリカの経済援助がなくなり，革命政府は財政難に直面した。ヴィエンチャン市などの主要都市の経済も活気を失った。中国系ラオス人を中心に，都市の商人や失業者が大量にタイに逃げたのである。

■難民問題解決のもう一つの道

このような背景から1975年12月以来，約33万7000人のラオス人が難民としてタイに流出した。その内26万8000人がアメリカやフランスなどの第三国に定住し，7万5000人が今もタイの難民キャンプに留まっている。

ところが，ラオスの場合，本国帰還プログラムが1980年以来，ラオス政府，UNHCR,タイ政府の合意の下で始まっている。ベトナム難民やカンボジア難民の本国帰還プログラムより，9年以上も先行しているわけだ。現在までに，3600人以上のラオス人が難民キャンプや第三国から帰還している。その他にも，1万5000人ほどの人が国連の手を通さずに帰国しているといわれる。この本国帰還プログラムを通して帰ったラオス人には，当面の食糧や生活必需品のキットが配られる。さらに，農村への帰還者には村ぐるみで学校，診療所，農地の造成などの開発援助が都市への帰還者には，職業訓練の機会が与えられる。今まで本国帰還のネックになっていたラオス政府の受け入れ制限が大幅に緩和され，今年5月からは毎月150人を受け入れるとの合意が上記三者間で交された。7月には168人がタイから帰還している。

クン・チャンペンやヴィエンチャン市に帰った他のラオス人と話したり，地方に帰った人の話を聞く限り，ラオス政府の帰還者に対する差別や圧力は認められない。しかし，遠隔地の帰還者の生活については知られていないことがあまりに多いし，ヴィエンチャン市に帰った人も就職難に直面することは目に見えている。ラオス政府は難民に対して技術を身につけて帰って来いと呼びかけているが，まずはラオスに帰っても自立して生き残っていく覚悟が帰還者にも要求されている。

ベトナム　覚悟の脱出―2度と故郷には帰らない

元シンガポール難民キャンプ担当　熊岡路矢

1982年，ベトナム「ボート・ピープル」を救援するシンガポールの国連難民キャンプで働いていた時，わずか9カ月のうちに，のべ5千人以上のベトナム人を海上からキャンプに迎え，また第三国定住のため欧州，米国，カナダや豪州に見送った。

海賊に襲われ，首から下が不随となり，車椅子のまま米国へ向かった25歳の青年。遠い親戚の待つベルギーへ，小さなショルダーバック1つを全財産として旅立って行った海上で孤児となった7歳の男の子。「長老が大事にされる」という故郷の共同体から切り放され，家族関係も壊れるなかで，なすことも無く一日中ボツネンと寂しく座っていた老人。

なかには，ベトナムを離れたことを後悔し，帰りたいという思いを語ってくれた人もいたけれど，全体としてみるとベトナム難民（その多くは南部出身者と1954年以降北部から南下したベトナム人カトリック教徒）は2度と故郷に戻らない，戻れないという気持ちで出てきている人が多かった。前「サイゴン」政権の関係者（公務員，軍人など）は，現政権下で処刑されるなどの迫害に直面しているわけでは無いが，ベトナム社会全体の貧窮と相乗して，生きていく上でのかなりの不利益，困難を背負い，全く希望をなくしている。ベトナムから非合法に船で出国し2，3隻に1隻は海の藻屑（もくず）となると言われる危険を冒しても，これらの人々がでてきたのは，この絶望感からであろう。

現在ロサンゼルスに生活するベトナム人の友人は「現在のベトナムの共産主義体制のもとでは生きたくない，そして現在の体制は俺の生きている内には変わらない」という理由で，2度と故郷を見られないだろうと言っている。このベトナム人難民の強い否定的感覚に比べると，ラオスやカンボジアから定住している人々は，私の知る限り，わりと素直に本国＝故郷に帰りたいと言う。

上記ロスのベトナム人の妻と子供3人は，ODP（合法出国計画）（注1）による出国を4年間待っていたがついに待ち切れず，昨年（1988年）9月，ベトナム東部の港市ブンタオから小船で非合法に出発し，未だに消息は不明である。

現在民間団体を含め，日本と国際社会がベトナムとベトナム難民帰還のために貢献できることは，一方でODPの活発化を図りつつ，他方多年の戦争で傷ついたベトナム本国の本格的復興に向けて協力することであろう。またさらに，もし東欧型の政治改革がベトナムでも起きれば，「本国自主帰還」の実現を含め，「ベトナム難民問題」が恒久解決に向けて大きく好転する可能性がある。

南シナ海で救助されて
UNHCR/R. Manin

（注1）ボート・ピープルの急増に対し，1979年，UNHCRとベトナム政府との間で覚書が交され，家族再会などの人道的ケースに限り合法的にベトナムから出国を認める「合法出国計画」が開始された。

定住難民の「帰還」意識　心の依り所は何処に…

定住難民プロジェクト担当　小野豪大

●はじめに

“1975年”という年は，インドシナ三国にとって歴史的に大きな節目であるとともに，大量の難民流出が始まった年でもあった。それからもう15年を経過しようとしているが，この間ある人たちは第三国と呼ばれる安全な国々に定住していったが，ある人たちは未だに東南アジア各地の難民キャンプに滞留し続けている。

日本定住に関して言えば，1978年に定住許可がおりて以来すでに11年の歳月が経過しており，日本社会（日本人）とのつきあいも長くなってきている。日本語を自由に操り，日本社会のシステムやマナーも身につけ，さらに日本国籍を得る人たちもだんだん増加しているようだ。また，より若い世代から急速に日本人に同化し始め，ラオス，カンボジア，ベトナムの人間としての民族性なるものも失っていく。

こうして概観してみると，定住難民は日本社会への帰属意識を年々強くしていく。つまり「心の依り所」は日本だと認識し始めているのではないかと思う。今やラオス，カンボジア，ベトナムは彼らにとって郷愁は感じても生活上の安心感は得られない所であり，その意味で「心の依り所」とは，とうていなり得ないのではないだろうか。さらにそれらの国々と結ばれている「信頼の糸」も，次第に細くなり切れてしまうのはそう遠い未来のことではないかもしれない。このような見方をすれば当然，定住難民の「帰還」意識も低くなり，世代を重ねるごとに「帰還」という言葉さえ死語になり，単に「訪問」「旅行」などという言葉で置き換えざるを得なくなるであろう。事実日本生まれの子にとって「帰還」という表現はピンとこないと思う。

●幾つかの事例を通して

それではこうした流れを具体的に検証していくために，幾つかの事例を見ていきたい。以下は数人の定住難民の人たちとのインタビューをまとめたものだが，「帰還」というものが彼らにどう映っているかは非常に個人的な問題であり，それは安易に一般化されるべきではないことを学んだ。しかし大まかな傾向を知ることによって，この日本社会に生きるマイノリティ（少数派民族）の将来を予想し，具体的支援プログラムにいかしていけるのではないかと思う。

●ラオスのKさん一家の場合

ラオス人のKさん一家は1982年に定住しているので，日本生活７年目を迎えたことになる。Kさん（46歳）はコンピュータ関係の設計を仕事としている。奥さん（40歳）はパートだが，日本人ばかりという職場に５年間勤続して頑張っている。子供たちは３人，長男（17歳－中３），長女（13歳－中１），次女（10歳－小３）。家族５人での団地住いはずいぶん狭苦しそうだが（しかし定住難民の人達に団地住いは非常に多い），それぞれ日本の生活にもすっかり慣れて楽しく暮しているようだ。

そこでKさんの奥さんと下の娘さんに「ラオスに帰ること」あるいは「ラオスに行くこと」について率直に尋ねてみた。まず奥さんは「私，ラオスに帰りたくないです。アメリカ，住みたい。私のお姉さんいるから」と答えてくれた。アメリカにただお姉さんがいるということだけではなく，そのお姉さんなどを通してアメリカ生活の快適さ（例えばエスニック・コミュニティが存在し，そこには文化が宿り，孤立感がないなど）についての情報をずいぶんもらっているのかもしれない。「日本よりもアメリカに住みたい」とアメリカ生活への憧れを示す彼女の「心の依り所」は，日本にも，またラオスにさえなくなってきている。

一方，下の娘さんはタイのウボン・キャンプで生まれ，３歳の時に来日しているので，ラオスでの生活体験が全くない。それにもかかわらず彼女は，「ラオスに住みたいと思う？」という問いにコックリとうなずいた。「日本はどう？」とさらに尋ねると，「ラオスが一番，日本は二番。三番目はタイ」と答えてくれた。予想に反する答えに少々驚いたが，これらの理由は彼女の興味の度合によるものらしい。現在，彼女はラオスの大人たちが子供たちにラオスのことを伝えていこうと開設した「ラオス語教室」に毎週通っている。ラオスの豊かさを知り，ラオス語も少

しずつ覚えてくるとラオスという国へ行ってみたくなるのも当然かもしれない。もしかしたら10歳の彼女には「住みたい」と「行きたい」の区別ができず，「行ってみたい」という意見で首を縦に振ってくれたのかもしれない。また二番目の日本は今住んでいる所，三番目のタイは彼女の祖母が住んでいる所という関心度らしい。

「他の家族はラオスに帰ることについてどう思っていますか？」という問いに，奥さんは「お父さんはラオスも，アメリカも住みたくない。日本が好きだから。上の娘もラオスには住みたくない。日本が一番いいと言います」と答えてくれた。

●「帰還」意識の低いKさん一家

さて，この家族を概括してみると，「帰還」に関する意識が非常に低いことがうかがえる。昨年Kさんは夫婦だけで「里帰り」をして，実際にラオスの生活ぶりを見てきているが，この体験も彼らの「帰還」意識に確実に影響していると思われる。カンボジアの国情とは違い，訪問できるし，情報が様々なルートから入りやすいということは逆に母国への郷愁を弱め，「帰還」意識の低下を招いているとも言えよう。

また下の娘さんが，「ラオスに住みたい」というのは，彼女にとって「もといた所に帰る」行動ではないので，「帰還」とは言えないだろう。「彼女のラオス」は実体験を伴っていないので，彼女だけのイメージでしかなく，Kさんたちの世代で共有しているラオスとは全く異なるのだろう。

●ラオス人の若者は

ラオス人の若者については直接インタビューはできなかったが，情報通の定住難民ボランティアの話によると，やはり「帰還」意識は低く，日本に経済的基盤を築くことに，ことのほか価値を見出しているらしい。また「帰還」(教育的背景)なども「帰還」意識に大きく関連があると示唆してくれた。すなわち，学歴の比較的高い人達は「ラオス国民」としての意識も高く（愛国心），「いつかは帰国してラオスの復興に尽力しよう」と考える傾向にある。しかしながら，比較的学歴が低い人の中には日本での豊かな生活を考える人が多い。全体的に「帰還」意識が低いラオス人の若者たちは，ラオスにおいても日本国内においても，次代を担っていく立場におかれている。果して彼らは，どういう方向を選択しようとしているのだろうか。

●カンボジアのCさん一家の場合

それではカンボジア人の「帰還」意識はどうだろうか。

Cさん（54歳）は1981年に奥さん（53歳）とともに定住した。Cさんはカンボジア国内で日本の通信社員と仕事をしていたといういきさつで来日した。ところが，彼は大和定住促進センターにいる時に病気で入院し，日本語学習の機会を逃がしてしまった。また比較的高齢の上，英語がよくできるということも，彼の日本語があまり上達しなかった理由かもしれない。しかし電気関係の会社には定住以来８年間勤続しており，既に職場ではリーダー格だ。一方，奥さんも働き者であったが，昨年から体調を崩して入院をくり返しており，現在自宅で療養中である。「もし妻の命がそれほど長くないのなら，カンボジアに一緒に帰りたい」と言う。こうした現状から察すると，彼らの「心の依り所」はやはりカンボジアなのかもしれない。

Cさんにはもうひとつ気がかりなことがある。それはお孫さん（17歳－中３男子）の教育のことだ。実はCさんの娘さん一家も近所に住んでいるのだが，３人の子供のうち長男が現在Cさん夫妻と同居して，高校の受験勉強中である。Cさんは彼を大学まで行かせたいと考えており，その学費を援助する義務を負っている。

Cさんに「もし彼が大学を卒業して独立し，その頃カンボジアも平和になっていたら，帰りたいと思いますか？」と尋ねた。すると彼は「もちろんです。でもポル・ポトのことが一番心配だから，向こうで住むとしたら名前を変えなければならないでしょう。実は昨年の12月カンボジアに行ってみようと思い，再入国許可証をもらったのです。もし帰れたら何かお店でも開けるかどうか見てこようと思って。でも結局妻の病気でその旅行もダメになりましたけどね」と答えてくれた。

こうした言葉から判断すると，Cさんの「心の依り所」はカンボジアなのだとつくづく感じてしまう。当然，「帰還」意識も彼の言葉にも現れているように非常に高いのだが，それは日本生活に挫折して帰る（消極的帰還）のでも，母国復興に尽すため帰る（積極的帰還）のでもなく，ただもといた安息の地へ自然に戻っていくという行動のように思える。

またCさんのお孫さんに焦点を当ててみると，とてもおもしろい。Cさんには同居中の17歳の男子を頭に12歳の男子，７歳の女子がいるが，下の２人はも

うカンボジアのことをほとんど忘れかけているし，ずいぶん日本に馴んできたらしい。ただ長男の彼だけがクメール語をよく話し，母国に対しても思いがある。しかしクメールの文字の方はどんどん忘れ，日本の教育環境で勉強すればするほど，カンボジアへ「帰還」したいという意識は遠のいていくようだ。仕方のない現実かもしれないが，彼を含めた20歳前後のカンボジアの若者が考えていることは，Cさんによると次のようなことらしい。

すなわち「彼らは，ただカンボジアに帰って暮らすことなど考えていない。日本で得た資金，知識，技術，人脈などを使って母国の復興のために何か事業をやることは念頭にある。もちろん日本とカンボジアの間で」というわけだ。この場合，年輩のカンボジアの人たちよりは強くはないにしても，「心の依り所」は郷土愛とでも呼べる形でカンボジアの地にあるのかもしれない。たとえ生活基盤のほとんどが日本にあるとしてもだ。

●カンボジアの若者Lさんは「帰還」を希望

Cさんが20歳前後のカンボジア青年について語ったことと同じようなことを，1982年に定住したLさん（29歳，男性）も言っていた。彼自身も経済的な復興に自分のできる立場で協力していきたいという。「カンボジアは農業中心の国で8割くらいの人達が暇です。私は彼らに仕事をつくってあげたいです」という希望を持っている彼だが，彼自身カンボジアに帰り，そこに再び根を張ってやっていくというのではないらしい。あくまでも日本との関係で事業をすすめていきたいということは，彼が日本国籍を取得し，身分を安定させたことからも想像できる。

しかしこうした母国への思いを語る若者ばかりではなく，引き続く内戦にもうあきらめていたり，また日本を謳歌し，「心の依り所は日本だ。もうカンボジアへ帰る意志はない」とキッパリ言う人たちもいるようだ。

●「心の依り所」は日本に

さてこれまでラオス，カンボジアの人たちのケースを幾つかみてきたが，流れとして「心の依り所」が日本へと傾いてきているのがわかるであろう。冒頭で定義もせずに少々あいまいに進めてきたが，「心の依り所」には2つの意味がある。ひとつには非常に個人的な「郷愁を感じられる所」，もうひとつはわりと一般化できる「生活上の安堵感を得られる所」としてである。日本に定住した彼らは少なくとも難民になる前は，これら2つの意味あいを持つ場所が一致していたはずだ。しかし迫害を受けることを恐れて，国を出て定住した人たちの心の状態を察すると，上記の2つの意味はそれぞれ別の国を指す。つまり「ラオス，カンボジアには郷愁は感じるが，生活上の安堵感というと今は日本である」ということだ。この例が多少の差異こそあれ，日本に定住して数年たったラオス，カンボジアの大人たちであった。日本に生活の基盤を置いた上で里帰りしたり，母国とのビジネスを考えたりする。しかし「多少の差異」というのは現在のラオス，カンボジアの国情である。ラオスは開放的で日本からもどんどん里帰りしているのに対し，カンボジアではいまだにポル・ポト派とヘン・サムリン政権との内乱が続き，里帰りもままならない。こうした母国の情勢が，特にその土地への郷愁の度合に影響しているのは確かであろう。

一方，難民という過程を経て，2つの国に分断された「心の依り所」も，幼少時に来日し定住年数もある程度たった子供たち，あるいは日本生まれの子供たちの世代から確実に統合されてきている。つまり「郷愁」の部分も（国を離れなければわからないものだが），「生活上の安堵感」の部分も全て日本，というわけだ。この現象を日本人化＝同化（Assimilation）と呼ぶのかもしれない。

●「帰還」意識の薄れと彼らの将来

こうした「心の依り所」の変化は前述したように「帰還」意識にも大きな影響を及ぼす。意識の低下は世代交代を経て，「帰還」という言葉を死語にしてしまうかもしれない。そのうち彼らの2世，3世の時代がきて，「おじいさん，おばあさんたちの国を訪問してみたい。その国のことばも習ってみたい」という子供たちが増えてくるかもしれない。一度その民族性が淘汰されたあとに。あるいはそうした自分の民族的ルーツを嫌い，より日本人になりたがる子供たちもある過程では増えてくるであろう。

彼らの将来は彼ら自身が決定していくことだが，現在の日本社会にも課題がある。少なくとも彼らが，自らの民族性に充分誇りを持てるような社会環境づくりである。また，このことはある意味で在日朝鮮・韓国人の問題と共通する部分があり，我々もより広い視野で，こうした事象をとらえていかねばならない。

エシャトーとダニエルの日本日記

東村 康文

今年，９月５日～10月21日にかけて，エチオピアから現地スタッフのエシャトー・カプティーマとダニエル・アビトゥーを招いて，講演会を行いました。

エシャトーはマーシャ村で，母子に対する教育を切り開き，芝居を使った教育を開発した人です。彼は，もともとコックでしたが，母親の重労働，子供の栄養や病気の予防という側面にも関心があります。彼の学習意欲は大変なもので，電車の中から畑が見えると，「ここで栽培されている作物は何？　どうやって料理するの？　農薬は使っているの？」と質問を浴びせてきます。「日本の料理は，簡単につくれてしかも栄養があるんだ。日本に滞在しているうちにいろいろな料理を食べて勉強したいし，日本の料理の本も買って帰りたい」とも言っていました。ダニエルは，JVCの緊急医療プロジェクト以来の経験を持ったスタッフで，物資輸送を担当しています。典型的な都会っ子の彼は，英語が得意で，講演会でも質問にテキパキと答えます。

日本全国（東京，松戸，栃木，群馬，大阪，奈良，熊本，福岡，横浜，山形，朝日町，白鷹，仙台，松山，広見，肱川，柏，武蔵野）でスライドを使った講演，マーシャ村で行っている啓蒙芝居（どうして木を植えるのか，木がどうして切られるのか），エチオピア料理の実演などを行いました。ハードスケジュールをこなせたのも，行った先々で様々なリアクションがあったからです。これらをすべて書くことはできませんが，彼らの感想を中心にまとめておきたいと思います。

まずは東京で約２週間過ごしました。なれない大都会の生活にほとほとまいったようで，「電車は超満員に混んでるし，たまたま座れた人も疲れた顔をして寝ている。ビジネスマンは忙しそうで，夜遅くまで働いている。これでは，父親は家族と過ごす時間がないのではないか。子供の教育は学校だけで終わるのではなく，家庭の中で養われるのだから，もっと家庭を大切にしなければならないと思う（ダニエル）」。またエシャトーは，「エチオピアでも若者は都市に住みたがる。しかし都会に出ても仕事がないので，飲み屋で給仕になったりする。また，都会に出て行く時は家族の許可をもらって行くわけではないので，帰ることができない。なぜアジスアベバに出て行くのかというと，夜の光がある，ビルがあるなどの理由だ」と説明してくれました。

今回の企画では，日本の様々な人と出会いました。足尾銅山跡と渡良瀬川流域で田中正造以来の公害問題に取り組んでいる人々，九州で地域医療を行っているお医者さん，山形県で地元に残ってがんばっている若者，チャリティサイクルのジュリアンさん，JVCのOBの方々，東京と愛媛で開かれた環境会議で環境問題に取り組んでいる方々です。「日本には数多くの問題がある。たとえば，農薬，核廃棄物，リゾート開発（ゴルフ場），ホームレスピープル，工場からの汚染廃棄物などなど。でも地方にいてそれに取り組んでいるすばらしい人たちがいる。（ダニエル，エシャトー）」と言っていました。

愛媛県の肱川町に招かれた時のことです。エシャトーが歴史資料館に展示されている石臼を見ながら資料館の方に一生懸命質問をしています。エシャトーは「マーシャ村でも石臼は使っているけれど，日

▼幼稚園にもいきました（愛媛県肱川町）

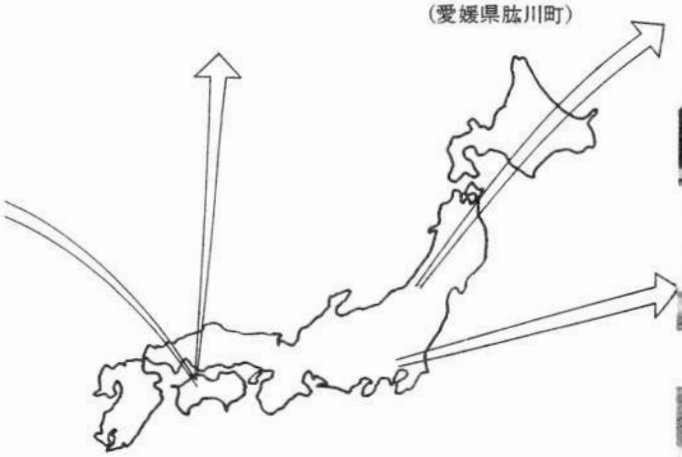
本のような円を描くように回すタイプではなく，前後に押し引きするタイプなので重労働になっているんだ。これをマーシャ村で作れれば，お母さんたちが助かるんだがなあ」と言いました。その夜，山岳有機農業学校を始めた坂根さん宅で，歴史資料館長，役場の方を交えて話合いを持ちました。石臼は，館長さんの家で昔使っていたものを下さることになりました。また輸送費は，公民館の方が中心になって，町の方々が募金をして下さることになりました。肱川町から送られたものをもとに，エチオピアの石工が作ります。

また山形県では，陶磁器を作っている所を見せていただきました。エシャトーが望んでいるのは，薄くてがんじょうで，軽く，塗料を塗った器です。その夜，Tree for Lifeの会の武田さんの実家で話合いました。「そういえば協力隊員でエチオピアに来ていた人が陶磁器の作り方を教えていた。土，窯のことなど聞けないか？（エシャトー）」「俺がなんとか連絡をとってみる。でも窯の火はどうしようか。（林）」，「今日見た職人さんが使っていたような石油を使ったバーナーはどうか。（エシャトー）」「炭を使ってできないかな。（東村）」「たぶん火が弱すぎるよ。（林）」どうもマーシャ村で作るのは難しいようです。

今回彼らに同行していて感じたことは，人と人の出会いのおもしろさです。出会う機会さえ作れば，思わぬつながりができます。彼らは日本の今の姿を見て，社会の抱える多くの問題を学んでいったと思いますし，それに取り組んでいる人がいることを知って勇気づけられたと思います。一方でエシャトーたちの存在が，日本で活動する人々に影響を与えたことも大きな発見です。特に足尾を訪ねた時に地元の人が「エチオピアの人が足尾の公害反対運動を勉強しにくるのだから，自分たちのやっていることは意義があるのだ」と自分に言い聞かせていたのが非常に印象的でした。林さんも「エチオピアでエシャトーたちががんばっているから，私は東京にいて主に財政的な面で，それを支えていく。おまえがいるから俺がいるという関係だ」と言っていましたが，やはり彼らから勇気づけられるのだと思います。

▲鎮守の森の中でお年寄りの話を聞く
「森は天然の貯水池」という言葉が印象的だった。
（愛媛県肱川町）

▲役場の方に農業の現状を聞いた
（山形県白鷹町）



お料理教室でワット（エチオピア料理，シチュー）
▼を作るエシャトー（神奈川県戸塚市）

投稿

伐採と闘う村

樫田　秀樹

村から歩いて2時間の森の中，3人のカヤン族の男が川で魚を獲っていた。網にかかった魚をとりながら，村の長老の一人，ムリンさん(70)は言った。「こんな奥地の小川も泥のようになってしまった。魚も以前は40cm以上のが沢山とれたのに今は……」丸1日かけてとれたのは小魚20匹だけだった。

時々，上流の方からズズーンという太砲のような音が響いてくる。

「爆弾が落ちているのさ」とムソンさんが言う。数十km上流でチェーンソーに切られた大木が地に落ちる音なのだ。

ここは，マレーシア・ボルネオ島サラワク州バラム地区，200km内陸に位置するカヤン族の村ウマ・バワン。6月下旬からの1カ月半と，10月下旬から半月の計2カ月間，私はここに滞在した。

カヤン族は古来より，焼畑，漁，狩り，豆やキノコの採取，ゴムや果樹の菜園などで自給自足の生活を続けている。しかし今，森林の伐採でその生活が壊されようとしている。

2年前の3月，ワン・ジョックさん(45)は自分の畑に行って驚いた。ブルドーザーが走り回り，伐採用道路が作られようとしていたのだ。

伐採が始まる！　村中が真剣になった。村に行動委員会が結成され，議長にジョック・シャオさん(38)が選ばれた。彼の指導の下，伐採用道路をバリケードと人垣で強行封鎖する作戦がとられた。1987年はカヤン族だけでなく，プナン・イバン・ケニヤ，ケラビットなどの他部隊も伐採に対し徹底抗戦した年だった。

6月，環境保護団体「マレーシア・地球の友」サラワク支部代表のハリソンさん(30)とジョックさんを含む，先住民の代表計12人が首都クアラルンプールを訪れ，環境大臣，資源大臣の他，主だった官僚と会見し伐採中止を訴えた。どの大臣も善処を約束し，警視総監は「警察は道路封鎖に対し，武力を行使しない」と約束した。

しかし，翌7月から警察によるバリケード解体と先住民への不当逮捕が始まった。ウマ・バワンには1987年10月29日に警察がバリケード解体にやってきた。

「あなた方は木材会社の操業を不当に邪魔している。そんなに牢に行きたいのか？」

「ここは俺たちの土地なんだ。それを守ることで逮捕されるのなら，してもらおうじゃないか」

バリケードには男だけでなく，女，子供で人垣を作っていたが，男のみ42人が逮捕された。その中には89歳の老人も含まれていた。ムリンさんは牢での生活を語ってくれた。

「犬以下の扱いを受けた2週間だった。蚊の群れの中でも寒い夜も，パンツ一枚だけでセメントの床に寝かされた。食事は手のひらにのるくらいの米と腐った野菜が一日二回。あの仕打ちをわしは忘れない」

そして，逮捕の翌11月には伐採用道路でのバリケード作りが違法化されてしまった。さらに2カ月後の1988年1月に伐採用道路が完成し伐採が始まった。土砂が川に流入し，魚が死に，動物は土地を離れ，村の土地は荒らされた。それは今も続いている。

村の小学校教師イマンさんの妻オボンさんは私に食事を出してくれた時に言った。

「お肉がなくてごめんなさい。以前はこの村の裏山でも毎日猪がとれたのに，もう1年も捕えることができないの」

「前だったら金がなくても食えた。でも今は金がなきゃ食べていかれないよ」とイマンさんが言葉を続けた。

サラワクの先住民の闘いはつぶされた。しかし，2つの例外がある。

一つはプナン族。今日も吹き矢で猟をするプナン族は，今でも道路封鎖を続け，毎回大量の逮捕者を出している。今年の9月10日は12カ所の村でいっせいに道路封鎖が行われ，私の訪れた村では幸い逮捕者は出なかったが，100人前後が逮捕された。

「なぜ道路封鎖を続けるのですか？」と聞くと，「私たちほど森に全てを頼って生きている先住民はいない。木材会社が私たちの土地を荒らす権利はない。森が死ねば私たちも死に絶えてしまう」と1人の男が答えてくれた。

もう一つの例，ウマ・バワンでは新たな方法，平和的な闘争を試みている。ジョックさんは次のように語る。

「道路封鎖は逮捕されるだけだからね。これからは，日本を初めとする先進国がサラワクからの木材輸入をストップするという根本的解決をめざす。そのために，先進国のマスコミや市民団体に直接私たちの問題を伝えていく手段をとる」

そして，今年の10月29日，逮捕2周年記念として，伐採により被害を受けている全ての先住民，「地球の友」，逮捕された人々の裁判を扱う弁護士，内外からのジャーナリスト，市民団体を150人集め一大集会が行われた。各民族が自分たちの持つ問題を話し合い，最後に，土地の所有権の確認や伐採中止などを訴える政府への請願書にサインをした。余興に行われたカヤン族の勇者の行進，民族ダンス，歌なども感動するくらいに盛り上がった。

この一日だけのために，半年も前から準備を始めていた村人の努力は賞賛の一言に尽きる。各家庭は，踊りの衣装作りや客のもてなしのために，床や壁をきれいにするのに多くの時間と多額の出費をついやした。接客係，舞台係など村人一人一人に細かな役がつき，ありったけの民具を集めた小博物館も作り，集会所を作るため長屋形式の4軒の家は一階の壁を取り去った。舞台で一番盛り上がった「勇者の村」という歌も村人の作詞作曲によるものだ。

ジョックさんは来年は違う村でこの催しをやってほしいと思っていた。しかし，今年ここまでやると他の村が尻ごみしたという。「またここでやるしかないな」と彼は苦笑した。

ウマ・バワンにはもう一つの問題がある。それは日本の農村も抱えている――若者の流出――である。

多くの若者は町で働くか，村近くの木材会社で働いている。ジョックさんはこれも解決しようとしている。その第一歩として，今年の7月30日に村始まって以来の大規模な焼畑が行われた。

村の農場の一つに，村の約半分の38家族が共同運営している焼畑農場がある。38家族の男のほとんどは逮捕された42人に含まれている。

20～30mの炎を上げながら燃える山を見ながら，ジョックさんが説明してくれた。「いつもの2倍焼いているんだ。なぜかというと，収穫の1年分は食糧として，もう1年分は売って金にして将来の新農業のために貯金するんだ」

「新農業って何ですか？」

「森に入って獣や魚を追ったり，焼畑だけではもう若い奴はついてこない。つまり，村がなくなってしまう。協同組合を作り，灌漑農業や養鶏，養豚，養殖漁業，果樹やゴムやココアの菜園といった定収入のある生活をめざさなきゃ。その他にも伝統手工芸品の販売なども考えている」

伐採反対だけでなく，村の発展も考えているのは少なくともバラム地区ではウマ・バワンしかない。

火入れの3日後，38家族による種まきが行われた。何十人もの男が横一列に並び，2mくらいの棒で地面にボコボコ穴を開け前進する。女性がそのあとに続き種モミを穴にまいていく。日陰のない場所での作業だ。暑い。良い収穫の期待を込めて，みな朝から夜まで汗だらけになり，東京ドームの何十倍もある大地で作業する。集会のあと農場を訪れると，稲が顔の高さにまで育っていた。収穫は来年の1月。良い結果を期待する。

ジョックさんは集会後，眠る時間も切りつめて，「地球の友」や他団体に宛てる村の発展計画書をタイプしていた。彼は本気だ。いつかはNGOが農業支援に入って来てもいい時期はあるはずだ。しかし，それは今ではない。村人はまだまだ自分たちだけで努力できる余裕があるからだ。

それよりも，私たちは日本の中でこそ彼らのためにできることが山とあるはずだ。サラワクから輸出される木材の60%は日本へと向かう。

「日本人はなんでそんなに木を使うの？」と時々質問された。包装紙，建材，読み捨て雑誌，ポスター……。誰もが信じなかった。彼らの信じられぬ生活を私たちはしているのだ，家具すらも道に捨てられている。

私たちは今こそ，私たちの日常生活を見直し，変えていかねばならない。私自身でいえば，志を同じくする人がいるのなら，開発教育や環境教育（特に子供たちへの）といったプログラムをJVCの中で作っていき，地域の市民運動と手を組み，少しずつでもこの浪費生活を改善していく努力をしたい。

また，私がぜひ実現させたいのは，ウマ・バワンへのスタディーツアーだ。そしてジョックさんを来年中に日本に招待し，日本各地で講演をしてもらうことも考えている。（以上の件，興味ある人は連絡して下さい。**〒135 江東区森下5－15－5 渡辺アパート5号 Tel 03(634)6072**）

のべ2カ月にわたるカヤン族との生活だったが，本当に安らぎのある人間らしい生活だった。その一つ一つの例は紙面の関係上割愛するが，もし生まれ変わるとすればあそこで生まれたい。私は本気でそう思っている。

いんたびゅう

・RIJで活躍する「ママさん活動家」

スザンヌ・マールさん

副社長時代より今が幸せ！

インタビュー原稿の締切の日が近づくにつれ，気が重くなりました。T&Eの編集責任者であるMさんはまもなく，出産休暇に入ります。ピンチヒッターのIさんは不慣れだろうから，早めに渡したい，そうは思うのです。しかし，インタビューする相手が悪いのです。英語しか話さない方なのです。学校卒業して20年，私の英語は観光旅行がようやくできる程度でしかないのです。

そんな情けない私に，Mさんは通訳の方を紹介してくれました。しかし，スケジュールが合わなかったら“なんとか頑張って”，期間が短いうえに，先方の都合もあります。だから早く連絡を取ればいいと思うのですが，つい……。

期限もかなりつまったある日の夕方に電話したところ，翌日ということになりました。そこであわてて通訳の方に連絡を取ったのですが，快く引き受けてくださって，取材が実現しました。

ということで，当日私を助けてくれたのは，飯塚美奈さん。この春，大学を卒業し，ある会社に勤めていたのですが，現場で活動したくて退社。数カ月の東京事務所で研修のあと，たぶん，カオイダンにいくとか。「もうすぐ閉鎖されるという話だから，1年でも2年でも閉鎖されるまでいたい」と大張りきりのお嬢さんです。どうもありがとうございました。頑張ってください。

これで長すぎる前置きは終わりです。あ，もうひとつ。そばで飯塚さんが助けてくれたわけですが、マールさんが言ったことが分かったと思ったときは，通訳は省略しました。私の下手な英語でした質問もかなりあります。ですから，もし間違っていたら，その責任はすべて私にあります。

さて，今回のインタビューはRIJ（後述）のスザンヌ・マールさんです。インタビューの直前にカンボジアにいらっしゃったということなので，その話からうかがいました。（A・G）

カンボジアを象徴するふたつの光景

「11月15日に成田を発って，バンコック，ホーチミン市を経由してプノンペンに入りました。ホーチミン市からはエア・カンボジアでしたが，5人ほど立ったままの人がいたのには，ビックリしました。NGOの関係者とか…。プノンペンの空港は，少し遅れて着いたせいなのか，真っ暗なのにまたビックリ。泊まったホテルも停電で……。

翌日はまず，JVCのRINEセンターに行きました。小さな建物かと思っていたら，立派な建物で感動しました。病院の設備も整っています。センターには，多くの人たちが働いており，杉江さん（JVC派遣の看護婦）と，相互に敬意を払って，すばらしい人間関係を作っていました。RINEセンターの仕事は重要です。なぜなら，カンボジアのお母さんたちは，赤ちゃんの世話の仕方を知らないからです。教育こそが一番です。

ただ，輸送機関が足りません。自動車が一台しかないのです。雨季になると道路がぬかるみ，徒歩や自転車しか交通手段のない，カンボジアの人たちは通院することができなくなります。

センターでは象徴的なふたつのできごとに出会いました。ひとつは，生まれてすぐ死んだ赤ちゃんが，お母さんのそばに寝かされていた。悲しい光景です。もうひとつは48歳の女性が，15人めの子ども生んだ姿です。欲しくはないでしょう。でも，家族計画を知らないのです。教育も，医療も乏しい，経済的にひ弱なカンボジアで，毎年，3％もの人口が増えていると言われます。

戦争はまだ終わっていない

次は学校に行きました。5年間の小学校で学校長は卒業率100％を目標にしていると言っていましたが，実際は途中で通えなくなる生徒がだいぶいるようでした。教師用の教科書と黒板があるだけで，勉

強もなかなか，はかどらないのではないでしょうか。

その次はリハビリセンターです。ここには足のない若い人が多くいました。国境地帯から帰ってきた人たちで，戦争はまだ続いているのです。彼らは16～18歳の子どもたちですが，政府には彼らを援助するに経済的な余裕はないようです。

ものを請う人の姿を多く見ました。道路のチェックポイントなどで車が停まると，負傷した人，老人，孤児らしき子……社会で一番弱い人たちが走り寄ってきます。もちろん，よいこととは言えませんが，他にどんな選択があるのでしょうか？　普通の人の月収が200リエル，ガイドや運転手などでも1000リエルしかないのです。物価が安く，米などの配給があるにしても，この貧しさです。

このほか，JVCの技術学校，国立小児病院など，精力的に訪問したのですが紙面の関係もあり，あとは，カンボジアの総合的な印象です。

「ともかく，極端に貧しい国ですね。西側からの援助が断たれているのが一番の原因です。一人一人が生活を改善しようと努力している姿も，うかがえますが，今のままでは，とても困難なことのように思えます。ただ，10年前のまったく何もない廃墟からここまで立直ったのは，驚くべきことです。社会的な基盤も整備されつつはあります。ですから，もっともっと，援助が必要です。国境の難民に使われている費用の何倍もの……」

幼い子が二人いるのに年2回の海外視察旅行

最初にマールさんに電話したときのことです。私は「ご自宅にうかがいます」といったのですが「子どもがいてうるさいから，近くの喫茶店はどうでしょう。ベビーシッターが来ますから」とのこと。そのときには，カンボジア訪問のことは知っていましたから“ベビー”がいるのにどうして行けるんだろう，と思っていました。

「子どもは3歳の女の子と2歳の男の子です」

え，そんな小さな子が二人も……。それに，そのときは今年の夏にタイの国境キャンプの視察に出掛けたことも，Mさんからの資料で知っていました。ダンナさんは許してくれたのかしら。

「カレの支援（support）が私を勇気づけてくれます。そして，理解ある態度を嬉しく思っています。といっても，長く滞在できないのはやはり残念。この夏は家族の休暇の時期に合わせたので，夫たちはバンコックに滞在していました。視察の途中から，家族と合流しました。今回は夫とベビーシッター任せでしたが，夫の両親がアメリカから来てくれました」

夫の両親が……。義父母が来るというと，緊張して“いい嫁”のフリをするおおかたの日本人とは，なんという違いでしょう。マールさんの話では夫の両親も活動に好意的だったとか……。

「私はニューヨークにいたときに，Bankers Trsut Co.のバイスプレジデントをしていました。でも，いま，RIJの活動をしている自分に誇りを持っています」

と，マールさんはいいます。

「日本人とガイジンの両方のスタッフと楽しんで仕事をしています。日本人と個人的に付き合うことができるのは貴重なことです。仕事はたいへんですが，得るものも少なくありません。私の希望は，一般の日本人，日本の会社にRIJのことを，もっと知ってもらいたいということです」

そういえば，資料にある後援者リストに並ぶ会社の8割以上がいわゆる外資系です。これには税制の問題もあるのでしょうが，残念なことです。

独自の収入源を確保しているRIJ

最後にRIJのことを資料を中心にまとめておきましょう。RIJとはREFUGEES INTERNATIONAL-JAPANの略で1979年，3人の在日外国人が『タイム』『ジャパン・タイムス』に難民援助の意見広告を出したことに始まりました。以後，NGOに対する資金援助団体として着実な成果を上げています。収入源としては，慈善演奏会，クリスマス・カードの販売，難民の手工芸品の販売でそれぞれ1千万円前後の純益を上げているのが大きな特徴です（'89年末のメサイアコンサートも中心人物がもとRIJの活動家で，RIJの力を借りています）。このほかに会費寄付金などで，計約4千万円の資金を得，アジア，アフリカ各地で活動しているNGOに，プロジェクトを指定して資金を送っています。JVCもタイ，ソマリアのプロジェクトに4件約400万円の援助を得ています。会員数 80人。内在日外国人 40人。会員は主婦が中心。

連絡先

〒100 東京都千代田区霞ケ関3－2－5
霞ケ関ビル19階　昭和シェル石油㈱内
☎03-581-2485（月曜～金曜 10時～15時）

JVC NEWS

紙の大切さ考えるチャリティー・ブックフェア

印刷の技術と経営を教える全国唯一の専問学校，日本プリンティング・アカデミーの学生と地元商店街が協力して，11月９日～12日まで，「チャリティー・ブック・フェア」が開かれた。

この学校では授業は午前中でほとんど終わるが，午後には「実践研究授業」という大学でいえばゼミのような授業がある。70人程の生徒が６つのセクションに分かれ，それぞれが“カラー印刷”，“文字情報”といったテーマを学んでいる。

今回のブック・フェアは，そのゼミの１つ“地域活性研究会”によるもので，顧問の加藤壽子さんは「印刷業は地域産業と密接に結びついている。イベントを企画し、人を呼び、地域が活性化すれば印刷物が必要になる。そういうことを，ただ理論だけでなく実践して覚えていきたい。」と話している。また，古本に関わることで，印刷業とは切っても切れない「紙」の大切さを考えることにもなったという。売り上げは，JVCの「グリーン・フォー・アフリカ募金」に寄付していただいた。

このブック・フェア，初めは出版社の倉庫に返品され，裁断処分されてしまう本を集めようということだったが，ダンピングなどの制約があるためどこの出版社でも難色を示され，10数件回ったところで断念。代わりに地元の家庭に古本の提供をチラシで呼びかけたところ，今年は10,000冊以上の本が全て無償で集められた。「本を取りに来て欲しい」という家庭のリストを作り，学生たちが１件１件回ったということで，文字通り足で集めたという感じだった。

1万冊の本が無料で提供されました

「本を書いた人の気持ちを思えば，二束三文で本をおろせないというのもわかるが，裁断処分にも大金がかけられているのです。」と加藤さん。熱帯雨林を乱伐した木材でつくられた紙がいかに無為に使われているか，資本主義のゆがみが見えてくるようだ。

今年で２回目のこのブック・フェアは，地域の活性化とともに，古本の活性化にもなったのである。評判は上々で，「年１回は少なすぎる，もっと定期的に回数も増やして欲しい。」という声もあるそうだ。

紙を使う印刷業者と木を植えるJVC，思いは一緒である。（金成）

カンボジア難民救済『法輪せんべい』いかがですか

『法輪せんべい』ってご存知ですか。これはJVCカンボジア活動の支援団体の一つ，浄土真宗高岡教区寺族青年会が販売しているもの。その販売収益は海外ではカンボジア難民救援活動へ，国内では障害者施設などに送られるという，大変有難いおせんべいです。（東京オフィスのスタッフも賞味させて頂きましたが，あっさりしておいしいおせんべいでした）高岡の企画販売運営委員会では，報恩講，ご法座，礼堂法要，法事などでのご利用をお勧めしています。

お申し込み・
お問い合わせ先は，

〒933
富山県高岡市
佐野1142番地

電話：
0766（22）3566

水波組　西養寺　村上教文（実行委員長）まで。

カンボジアから

ソック・サバイ

杉江 美子

田植えに忙しい母親たち

皆様お元気ですか？ カンボジアでは今年の雨期（5月から10月）は雨が少なく，深刻な米不足が心配されています。9月中旬になりやっと本格的な雨が降り始め，今農家の人たちは，ここぞとばかりに田植えに精を出しています。農業機械なんてありませんから，男の人が牛を扱って田を耕し，女の人が手で苗を植えていきます。ほんとうに良く働きます。

そういうわけでこの時期農村は忙しく，村で行う週1回の巡回母子保健活動（Mobile RINE）では，お母さんたちを少々（1時間ぐらい）待たねばなりません。お母さんたちは，朝の比較的涼しいうちに田植えを一段落させ，小脇にひょいと子供を抱え，三々五々集まってきます。中には年長の子供が弟や妹を抱えてやってきます。その中のお母さんたちは田植えが終らないのでしょう。子供が子供の面倒をみる，child－to－child の概念は，まずこの子たちから学ばねばなりません。

熱の入る助産婦さんの講習

10月2日よりプノンペン郡で村の助産婦さんを対象に1カ月の講習が始まりました。先生は2週間の指導員養成コースを終えた，プノンペン郡病院の助産婦マツサモンさん（38歳）です。マツサモンさんは熱心に教えるあまり，5日目には声を枯らしていました。彼女は教わることにも，教えることにも意欲の高い人です。郡や村の助産婦さんたちは，お互いに旧知の仲ですから，講習は非常に和気あいあいとしたものです。彼女たちの世界が広がり，そして村人たちの世界が広がるような教育の場を，これからも提供していけたらと思います。

標題の“ソック・サバイ”は「元気な」という意味のカンボジア語です。語尾を上げると「元気？」となり，語尾を下げると「元気だよ」となります。

ベトナム兵の帰った日

国道1号線を通って撤退▶

カメラを向けると恥ずかしがった子供たち▼

ステキな笑顔だと思いませんか▶

写真撮影／古西　勇，杉江美子

ボッダ河の
銀色に輝く賜物

今回は民話を織り込んだ，児童文学の一節を紹介しましょう。単に子供向けにやさしく書いた読み物ではなく，生き生きした感受性が，見事に再現されています。鈴木喜久子さんという方によるバングラディシュ文化の紹介誌「遡河」から転載させてもらいました。

バングラディシュは国土の大半が低地で，ガンジス河とブラマフストラ河の河口デルタ（三角州）地帯に位置しています。河の間をつなぐ水路を，雨期には泥色の水が流れるのです（昨年の大洪水では国土の四分の三が水に浸されました）。

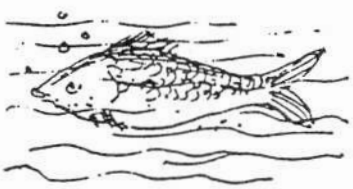
まだ見ぬ河へ出かける胸の高なりが幼児期の回想の形でつづられていますが，詩的表現や独特な言い回しも味わって読んで下さい。文中に出てくる「イリシュ」とは魚の名前です。(村田広平)

・・・だがベレ魚の卵が黄色くてどんなに美しかろうと，揚げえびがうまかろうと，それはイリシュではない。銀色に輝いてはいない。水路はボッダ河（現在のガンジス河の本流，広大なベンガルデルタを流れる）ではない。

ボッダ河へ行かねばならぬ。そこですなどる，ボッダ河の銀色に輝く賜物－イリシュ。月のようなイリシュ。剣のようなイリシュ。胸にはおのが肉厳，背に鹿の肉。あれほど素早くうごめく物はいない。森の美・美の蜃気楼だ，鹿は。嵐のように現れる虎の前足を瞬時に避けるその鹿でさえ。だが，イリシュと競えば負けてしまう。かあさんのおとぎ話のイメージが私の眼の内に焼きついている。

イリシュと鹿は賭けをした。もしイリシュが鹿を負かせば，鹿はイリシュに自分の肉を切って与える。勝てなければイリシュは鹿に自分の肉を切り取って与えるのだ。母からこの賭けの話を聞いた途端私は戦慄した。私の二つの夢－イリシュと鹿－それに思いをめぐらすだけで，私の両眼はその美に満たされる。どうしてそんな賭けをしたのだ，彼らは。どちらが負けようと私の夢は破れる。私の目の宝石は。私の夢である肉から血が流れ出よう。私はそれを考えて震え上がった。どちらも負けずどちらも血を流さないということができないのだろうか？鹿がもし負けてしまえば，その緑の森は血に溢れるのか。そしてもしイリシュが負ければ，ボッタ河からどくどくと血の急流がやってくるのではないか？

その話を聞いた幼い頃，私は森をまだ見たことがなかったし，鹿も見たことがなかった。だがイリシュは見ていた。だからわたしにイリシュの方を少しひいき目に見る気持ちがなかっただろうか？あった。だから母が，鹿がイリシュに負けたと言った時，私の心の悲しみはそれほどではなかったのだ。だがそれは鹿に気付かれないようこっそりだった。



イリシュ

「花の匂いで眠れない」より

鹿は負けました－母は言った－そこで自分の肉を切ってイリシュに与えました。だからイリシュの背中には焦げ茶色の肉があるのです－と。だからその部分の味はちょっと違う。その部分を食べるときは森の香りがする。また他のところはボッダ河の香りがする。そのイリシュ，その負ける事を知らぬ敏しょうさ，その優美さ，ボッダ河の懐にあるその銀色の賜物を拾ってこないのか？ボッダ河へ行かないのか？山のような泥色の波を見ないのか？真夜中にこの世と思えぬ国から汽船がやってくるが，そのぽおおおーという音で私の夢が破られた夜は数知れない。そして見た，白いすすきの茂みからさらに続く白いすすきの茂みを。そのこの世ならぬ汽船を見ないか。

何年もの間行きたがっていたが，しかし誰が連れて行く？ボッダ河には魚がいっぱいいるのみならず，恐怖も満ちていた。わたしはうまく泳げなかったし，年も幼かった。だから私は水路でなければならなかった。ボッダに行くわけにはいかなかった。自分の手で生きているイリシュを触れることはなかった。だがそれからとうとう許可を得たのだ－イリシュを取りに行ってよい。私の血は騒ぎだした－行く，行く，行く。どこへ？ボッダ河へ。

フマユンアザド作　川村千月訳　「花の匂いで眠れない」－「遡河」1号より抜粋－

JVCプロジェクト

1989年11月25日　現在

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
東京本部	渉外，事業計画，資金調達，ボランティア調整，会計，総務，情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会－毎月第1月曜日　午後6時～8時 毎月第2，4土曜日　午後2時～4時	全国社会福祉協議会	岩崎駿介（代表） 林　達雄（事務局長） 熊岡路矢，星野昌子，前川昌代，鴇田三芳，加藤志保，岩崎美佐子，富安光子，池島千津子，アイネス・バスカビル
神奈川県 （JVC神奈川）	神奈川県内における渉外，事業計画，情報収集，資金調達等を行う。 神奈川県および県内の市民団体との共同事業の企画，運営。 10月15日，ポートウォーク横浜'89が開催された。ゴールの港中学校でのフリーマーケットを含めて，約900名の人々が参加した楽しいイベントであった。集まったお金は，JVCなど5つのNGOに寄付される。		山口誠史，
日本国内	**●定住難民プロジェクト** 10月15日，ポートウォーク横浜'89のフリーマーケットに参加。カンボジア人夫婦の協力でカンボジア料理店を開いた。収益金は36,850円。 10月22日，ドナーであるケアハウスさくら苑の秋祭りで，曹洞宗ボランティア会と共に「難民のことを知るコーナー」を担当した。 ラオス，カンボジアの方々が国際理解講座の一環として，10月26日，28日は藤沢市立大庭中学校で，10月21日，11月2日は豊島区の仰高小学校で講演会をした。 11月23日，ケアハウスさくら苑でラオス，カンボジアの舞踊団が，お年寄や一般客に伝統舞踊を披露し拍手喝采をあびた。	ジャパン・タイムス神奈川県福祉部禅林寺龍華会基金，国際交流ホスピタリティトラスト，日本少林寺拳法連盟，ケアハウスさくら苑 チャリティーカレンダー	小野豪大，他約60人
	●東金農場 自給用の野菜を作っている。 東金で産直運動をしている"さかさま農園"や山武ボランティア協会などと，毎月1回勉強会を行っている。		松岡美奈子 東金市民有志
エチオピア （ウォロ州）	**●総合的復興促進（マーシャ）** 1. 植　林 山間部斜面での苗木の植えつけが終わった。女性たちが苗木を運び，男性たちが植えつけた。 2. 母子保健・栄養 1月からお母さん学校を始めているアダグイヤ地区で栄養調査を行ったところ，体重身長比で70%以下の子供が20%近くいることがわかり，集中的に家庭訪問指導を始めた。今さらながらにエチオピア村落の健康状態が劣悪なことが確認された。 3. エチオピア人スタッフの日本訪問 9月5日にエチオピア人2名が来日し，植林の意義を伝える寸劇などを用い，各地で活動報告を行った。エチオピアの目から見た日本の姿が，私達自身の暮らしの問い直しに役立った。	CRDA，WFP，犬養道子・みどり一本運動，モラロジーMIRC東京グリーン・ウォーク，西本願寺，チャリティ・サイクル，Tree for lifeの会，中部善意銀行，朝日新聞厚生文化事業団毎日新聞社会文化事業団 チャリティーカレンダー	鈴木直喜，山田　盛，江原浩昭，江原広美，田尻真由美，イエットベルク，ソロモン，バレタ，ダニエル，エシャトー，トーマス，シュクール

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
ソマリア マガネイ・キャンプ （ゲドー郡） ハルバ・キャンプ （ゲドー郡）	**●農業による自立促進** ルーク地区で活動している4つのNGO(JVC, WCI, AMREF, ELU/CARE)の合同ミッションが，治安の状況を観察し，外国人スタッフがルークに戻れるか否かを検討するために，10月初旬，ルークへ派遣された。この合同ミッションの報告やその後の状況推移をみて，つい最近日本人スタッフがルークへ戻った。この間の活動は，ソマリア人スタッフに多くを任せてきた。 また，10月から約1カ月間，日本に一時帰国していた金子と中野がソマリアに帰任した。	UNHCR, 仏国土をつくろう会	金子一弘，シアッド．ムハボ， 磯田厚子，中野周二， アオキ，アブディナサル， ヒレ，ラシッド
ジャララクシ・キャンプ （ヒラン郡）	**●農業による自立促進** ルークと同様，治安は一時期から比べると回復しつつある。また，この難民キャンプでも難民の再登録が始まった。JVCの指導にもかかわらず，難民たちはメイズや玉ねぎばかり作る傾向がある。混作や輪作普及のため農業技術者・船川が奮闘中。	UNHCR R.I.-Japan	船川秀夫，シュクリ
カンボジア カンポット県 プノンペン カンダール県	**●サンタピエップ技術学校／ワークショップ** 87年8月から現在まで6台のトラックのエンジン・オーバーホールを終え，現在そのうち5台が稼動中である。ほかにブレーキを中心とした中程度の修理が約20台，熔接や塗装などの修理を入れると約150台のトラックの修理を行ってきたことになる。 カンボジア人スタッフは現在32名おり，その中には技術学校の第一期卒業生13名が含まれている。 第二期の授業は88年11月から一年間の予定で開始された。生徒はスタッフ23名で，孤児2名を含む。教育省より送られた2名は勉強を終えプルサットへ帰った。7月初めから，機械工，板金工，訓練生合計5名が新たに加わった。スタッフ等25名が4つのグループに分かれ，日本人技術者の指導のもとに実習をかねた車の修理を行っている。 8月下旬より新しいメンバーのグループを中心に理論の学習を始めた。また，三菱の部品が着き，訓練生を中心にしたグループからエンジンのオーバー・ホールを始めた。 今年度の目標は，生徒が実習の経験を十分に積めるようにするため，エンジン，車体すべてのほぼ完全な修理を20台以上行うことである。そのため，トラック10台分の新品のスペアパーツ，パッキン等，定期交換部品10台分が必要とされる。 **● RINE（ライン）プログラム〔母子保健活動〕** プノンペン郡RINEセンター責任者の助産婦が，7月31日より2週間，母子保健局主催の指導者養成コースに参加した。彼女が中心となって，村で活動する助産婦を対象に1カ月の訓練を10月2日より実施する。第2回目の巡回母子保健活動(Mobile RINE)は7月14日に開始し順調にすすんでいる。6月2日に着工した新産科病棟は，9月29日完成した。 **●井戸掘り・給水** 今年の計画は，30本の井戸を掘ることである。今までにプノンペン市内で7本，カンダール県内で10本（そのうち1本は水源に行きあたらなかった），コンポン・ソム市で6本の合計23本の井戸が掘られた。 9月末はプチュンバンといい，日本のお盆にあたる。それをプノンペンで過してから，10月初めにカンポット県に行き，5本の井戸掘り活動が予定されている。	創価学会青年平和会議，モラロジーMIRC，立正佼成会，日産労連，西本願寺，善興寺ダーナ基金，高岡寺族青年会，覚法寺，「チャリテイ・ウオークかながわ」，毎日新聞大阪社会事業団，国際ソロプチミスト千代田，明るい社会づくり運動神奈川県協議会，浄土宗東京教区青年会，和平基金，国際保健協力市民の会（SHARE）仏教救援センター，四日市商業高校，日蓮宗宗務院，横浜市「世界ふれあいキャンペーン」，「お告げのフランシスコ姉妹会」，中部善意銀行，「カンボジア会」，チャリティーカレンダー，堺市ロータリークラブ，日本ボーイスカウト広島第20回全日本仏教青年会，カリタス・ジャパン，「第1回チャリティー・コンサート」，我孫子「ムダの会」	古西　勇，馬　清， 杉江美子，本橋　栄 〔カウンター・パート〕 （運輸省） タック・カン，アム・ディエン，メアス・サメット，ゲット・ソーン，カム・ボラ （保健省） アン・サルン医師 （カンダール県保健局） ニム・ニエム医師 （農業省水利局） セン・ロー

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
タイ バンコク事務所	①総務，会計，資金調達 ②各機関（国連，タイ政府，日本大使館，各国民間援助団体）及び東京事務所，ラオス・カンプチアを含む，各プロジェクトとの連絡調整 ③情報収集，広報活動 ④在タイ日本人との連絡調整 10月20日，CCSDPT（タイにおける難民関係のNGOの集まり）の年次総会が開かれ，「難民の帰還」に関して話し合われる。 11月2日，ビルマ関係のNGOの集まりに出席。 11月12日，日本人学校の運動会で主婦ボランティアが古本を売る。	全国社会福祉協議会 電力労連	ポンピモン，カモン，大石道子，チャタヴァデ 主婦ボランティア15名
カオイダン （カンボジア難民キャンプ）	**●西崎憲司記念技術学校** 現在，180名の生徒が一気筒エンジン，単車，自動車，溶接，大工などの技術訓練に励んでいる。 4月の台風で崩壊した本部棟と理論コースの教室棟の修理が終った。 JVC技術学校で出版しているクメール語で書かれた教科書を，以前からプノンペンへ送っていたが，来年からその規模を拡大することを検討中。	UNHCR， SV（Stichting Vluchteling）	ソムヨット，清水俊弘，スティ・ネップラコン 久津輪　雅
パナニコム （第三国定住待ちキャンプ）	**●日本語学校** ・日本定住予定者へのプログラム ①日本語教育　②日本文化・習慣の紹介 ③渡航準備オリエンテーション ・他国定住予定者へのプログラム 10月31日よりベトナム難民2名が日本語学習を開始した。 11月10日　バン・ナポーキャンプよりラオス難民61名が到着。20日より46名が日本語学習を開始した。 生徒数　ベトナム　3名 ラオス　46名　計49名	天理教千葉 R.I.-Japan	竹村雅義，熊沢ゆり
地域開発（CD） （バンコク市内のスラム地区） （ブリラム県のM村）	**●奨学金プロジェクト** 後期のための奨学金支給を行った。 **●クロントイ図書館** 図書館の裏に消火器等を保管する倉庫を作ることになり，コミュニティ委員会のミーティングに参加した。 11月18日，主婦ボランティアが子供たちに工作指導を行った。 **●農村開発** 伝統医療に関するセミナーに参加した。 **●その他** コーディネーターのワティット・チャンスリヤウォン，スラム生活改善担当のガームシン・ロンクンは10月いっぱいで辞任した。	モラロジーMIRC，Tree for lifeの会，雄勝町町内寺院会，国際ソロプチミスト駿河，長谷川勉チャリティーウォーク，JOFIC，電力労連，からし種，チャリティーカレンダー	ワティット，サムルアイ，リーラ，コメン，今泉恵，ガームシン
ラオス （ヴィエンチャン県 ボーリー・カムサイ県 カンムアン県）	**●生活改善指導員養成プロジェクト** 6月22日，第一回養成コースがスタート。現在，ヴィエンチャン県をはじめ，4つの市，県から集まった27名の研修生が，センターと出身の村とを往復しながら講義と実習を重ねている。研修生が地方で母子保健を中心とした普及活動を始める10月20日以降，JVCの看護婦が巡回して，実践指導を行う予定。	UNDP 庭野平和財団 難民と地球の緑を考える会 横浜インターナショナル・ウイミンズクラブ スコティッシュ・ナイト・イン・専修寺，聖ヨゼフ老人ホーム，堺市ロータリークラブ，老人ホーム天寿荘，チャリティーカレンダー	谷山博史，北詰秋乃，原田恵津子

Trial & Error（試行錯誤トライアル・アンド・エラー）第95号
発行日　1989年12月20日発行（毎月20日発行）通巻95号
1982年8月16日第三種郵便物認可

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとはーJapan International Volunteer Centerは1980年2月，タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの，インドシナ難民の大量流出をきっかけに，日本から駆けつけた若者と，現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり，現在の組織の原形ができました。JVCは，活動者の自発的な意志に基づき，日本の個人・団体からの寄付金，国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは，人種，国籍，習慣，宗教その他の信条の違いを越えて，難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶JVCの会員募集について ―― 会員は，総会に出席し，JVCの方針などを決定する他，情報・資料の入手，各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。会員の種別と年会費は以下の通りです。また会費には機関誌の購読料が含まれています。

・正会員（一般会員　10,000円　活動者会員　3,000円
　団体会員　30,000円　学生会員　3,000円）
・賛助会員　金品による支援（金額は自由です。）

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について
・毎号1冊送付　年間購読料　3,000円
・毎号4冊送付　年間購読料　10,000円

▶送金の方法 ー 下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
①会員：東京5-48365　加入者名－JVC会員係
②T/E：東京3-54186　加入者名－JVC東京事務所
（住所，氏名，購読開始月をお書き添え下さい。）

編集後記

▶「故郷」とか「心の拠り所」とか，日頃あまり意識していない。ところが，この特集にかかわって，改めて考えさせられた。いながらにして世界の動きを瞬時にキャッチできる現代，世界は狭くなり，伝統的な生活が失われつつある。世界はどこに向かって動くのだろうか。一人ひとりの「心の拠り所」は一体どこに落ち着くのだろうか。（鴇田）
▶同じ一人の難民の中でも，国を離れた理由として，政治体制への不満，生活上の困難，子供の教育に関する願望，家族再会への希望などが，混在している。したがって難民の「本国帰還」を実現する条件も，一筋縄ではいかない。顔の思い浮ぶ，「彼」や「彼女」が笑顔で「故郷」の地を再びふむ日が来ることを望む。（熊岡）

▶みなさまの募金が支えるJVCの活動ー救援活動をより充実させるため，以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

A. アフリカ難民救援募金　（11月小計　57,352円）アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。

B. グリーン・フォー・アフリカ募金（11月小計　363,000円）アフリカの土壌回復，農業，植林等に使われます。

C. インドシナ難民救援募金（11月小計　5,000円）タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。

D. カンボジア募金　（11月小計　115,880円）カンボジア国内の復興のために使われます。

E. タイ・スラム募金　（11月小計　46,367円）バンコク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及び図書活動に使われます。

F. スラムの子供奨学金・基金（11月小計　10,000円）バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。

G. タイ農村募金　（11月小計　23,000円）タイの農村開発のために使われます。

H. 定住難民募金　（11月小計　0円）定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。

I. JVC運営経費募金　（11月小計　20,000円）現場を支えるのに不可欠な事務運営経費，人件費に使われます。

J. ラオス募金　（11月小計　61,200円）ラオスの婦人の生活向上プログラムのために使われます。

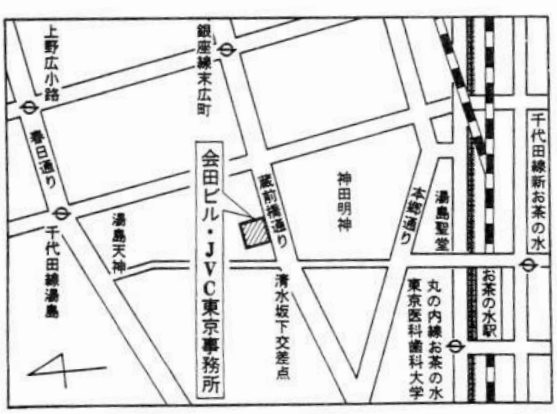
K. 無指定募金　（11月小計　347,373円）

▶送金の方法－下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
東京9－27495（募金種目名をご記入下さい。）
加入者名－JVC東京事務所

犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497　（11月小計157名　1,047,172円）

犬養道子さんの御厚意により，JVCに上記の口座を設けました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使われます。



1989年12月20日発行（毎月20日発行）
編集人　鴇田三芳　熊岡路矢　池島千津子
発行人　林　達雄
発行所　日本国際ボランティアセンター（JVC）東京事務所
〒113　東京都文京区湯島3－1－4　会田ビル5階
☎03（834）2388　FAX：03（835）0519
Telex：7604025　JVCHQ UC
神奈川事務所　〒231 横浜市中区山下町2　産業貿易センタービル9F　㈶神奈川県国際交流協会内　☎045（671）7082
印刷所　(株)ベスト・プリンティング
＊本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。